
東方Combat

龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方Combat

【Nコード】

N8731T

【作者名】

龍

【あらすじ】

東方のキャラが実在の戦闘機に乗ってドンパチするという、2chに転がっていたネタで試しに書いてみた物です。
一部キャラや機体の設定におかしな部分がありますが、だいたいは後に何らかの理由付けされます。

気分転換で書いている面が多いので、定期更新はあまり期待しないでください。

STAGE 1. Scarlet Land (前書き)

以下、本作をお読みになられる場合の注意点を書いておきます。

1. 原作は基本無視です。
2. 『種族』の違いはありますが、『能力』の違いはありません。
てか能力そのものがありません。
3. 東方名物スペルカードはスの字も出てきません。
4. リアリティーはあまり期待しないでください。

STAGE 1. Scarlet Land

その夏の日も、幻想郷は紅い霧に覆われていた。

『異変』の調査と解決を生業にする博麗神社の少女、博麗靈夢^{はくれいれいむ}は、人里の飛行場にいた。

「おお、靈夢、こっちはもう準備できてるぞ」

人里の自警団で飛行隊長を務めている藤原妹紅^{ふじわらのもこう}が飛行場に入ってきた靈夢を見ていった。

彼女の後ろには、彼女と同じ耐Gスーツを着た者が10名ほど、更に上白沢慧音^{かみしらさわけいね}ら野戦服に身を包んだ一団が待機している。

彼らは、これら紅い霧によって大迷惑しており、異変解決のために発生源である湖中の館、紅魔館へ向かう靈夢に同行を申し出、これまでの幾度かの調査により今回の敵が予想を大きく上回る規模を持っている事を知っていた靈夢も、渡りに船とばかりに申し出を受け入れたのだ。

自らの巫女服と同じ、紅白のスーツに着替えた靈夢の愛機F-15Jイーグルが先頭を切って離陸し、F-16Aファイティングファルコンに乗る藤原妹紅が指揮する自警団飛行隊のF-5Eが9機の計10機、さらに陸戦隊約180名がC-130輸送機3機に乗って続いた。

「よし、行くぞ妖精共！」

時同じくして、靈夢達と同じく紅魔館へと向かっていた少女、霧雨魔理沙^{きりまりさ}は、紅魔館周辺にいる妖精達を言葉巧みに味方につけることに成功していた。

妖精達をまとめている、特に力の大きい存在である大妖精と、彼女

を「大ちゃん」などと呼ぶ親しい妖精達、チルノ、ルーミア、リグル（ルーミアは妖精ではなく、妖怪）は、魔理沙の口車に乗せられている事を解っていたが（チルノを除く）、実際紅魔館とは、警告を無視して館に近付いた、等と門番や警備の妖精メイド達とちよくちよく喧嘩になっていたので、巧く乗せられて戦意に溢れている妖精達を別に止める気はなかった。

魔理沙の“コレクション”の銃器類で身を固めた30名ほどの妖精達が、同じく魔理沙に借りたAH-1コブラに乗る大妖精達に続いて飛び立っている。

妖精達に先行し館に接近した魔理沙の操るF-2に、紅魔館からスクランブル発進してきた2機の紅く塗装されたAV-8Aハリアーが追いすがすが、それを無視して上昇し、紅魔館の裏手にある飛行場、その駐機スペースめがけて吊るしていた500ポンド爆弾3発を叩き込もうと降下を開始、したところで魔理沙の目にあるものが映りこんだ。

紅魔館の屋上に上り、こちらに筒状の物の先端を向けて構えているメイドの姿を認めた瞬間、嫌な予感に突き動かされた魔理沙は爆弾を捨て全力で操縦桿を引いた。

因みに、F-2にはフライ・バイ・ワイヤが採用されており、これは操縦桿にかけられた圧力を電気信号に変換するシステムだが、これのおかげでF-2の操縦桿は幾ら力を加えても数ミリしか動かない。

上昇を始めたF-2のアフターバーナーが点火されると、筒状の物、ステインガー・ミサイルが発射されるのがほぼ同時だった。

「いやー、危なかったぜ」

何とかステインガーの追跡から逃げ切った魔理沙だが、その逃げている間に紅魔館は迎撃態勢を整えてしまったようで、既に飛行場からは、効率よりスピードをとったのであろう、次々とハリアーが垂直離陸してその数はじきに2ケタに達しようとしている。

魔理沙は最初、このまま逃げようかとも考えたが、自分の後に付いて来ているであろう妖精達の事がふと頭に浮かび、あきらめて戦うことにした。

「逃げたら、流石にあいつらが気の毒なんだぜ……」

それから約10分後、妖精達と霊夢達も紅魔館上空に到着していた。

「よう、霊夢。久しぶりなんだぜ」

霊夢機を見つけた魔理沙が通信を行う。

「さっそくなんだが、助けてくれ」

「……なにやってんのよ、あんたは」

魔理沙は合計15機ものハリアーに追いかけまわされていた。

「それでも、頑張って2機減らしたんだぜ」

「ターゲットロックオン」

霊夢は淡々と魔理沙機に最も近かった1機にレーザー照射を行った。

「ファイア」

イーグルの胴体下に吊るされている4発の中距離空対空ミサイル、AIM-7Fスパローの1つが切り離され、マッハ4の高速でハリアーに迫る。

狙い過たず命中し、そのハリアーは四散した。

妹紅率いる戦闘機隊も猛然と突っ込み、ハリアーとの間で熾烈な空戦が始まった。

紅魔館の正門付近でも、妖精達が突入して館の守備隊との間で銃撃戦が行われている。

数の上ではともかく、亜音速が限界で速力に劣り、苦戦を強いられているハリアー隊の中で、唯一圧倒している機がある。

紅の上に銀色のラインの入った隊長機を駆る十六夜咲夜は、巧みに機体を操り超音速の出せない低空での戦いに持ち込み、2連装30

ミリ機関砲とAIM-9Lサイドワインダー近距離空対空ミサイルで立て続けに2機のF-5Eを屠っている。その彼女が次の獲物に選んだのは、超低空を飛び回って紅魔館の防御陣地に攻撃を加え続けている鬱陶しい存在、攻撃ヘリAH-1コブラであった。

妖精達に銃撃を加えていた機銃陣地の1つに70ミリ対地ロケット弾を連続して叩き込み、同陣地を制圧した大妖精達は、こちらに狙いを定めた敵機を迎撃するため、旋回した。

コブラの機首に装備されている20ミリ機関砲が乱射され、20ミリと30ミリの弾幕が両機の間で交差する。

回避行動を行いながら撃ったものの、回避しきれなかった30ミリ弾がコブラに命中する。

軽量小型のコブラにとって、威力の大きい30ミリ弾は致命傷になりかねない。逆に咲夜のハリアーにも数発が命中し、この数発が大ききはないが、深刻な損害を与えている。

「チルノちゃん、やっちゃえ！」

コブラの損害を確認して、さらに追い撃ちをかけるべく旋回して戻ってこようとするハリアーに対し、コブラの側面から身を乗り出したチルノとそれを支えるリグルがFIM-43レッドアイのランチャーを構える。

「えっと、これでよかったよね？」

大妖精に教えられた通りに引き金を引くとミサイルが飛び出し、ハリアーの排気熱をとらえて追尾を始める。

しかしこれは急旋回で簡単に回避してしまったが、これは技量云々と言うよりも単にミサイルの性能の問題である。

ともかく敵機を追い払うことには成功したが、

「……ちよつと無理みたい」

「うん、脱出しようよ」

30ミリ弾の連続した直撃に機体が耐えられなかったようである。

4人はヘリを湖面に着水させた後、MP5、UGI等、4人はそれぞれ武器を持ってヘリを飛び出した。

STAGE 1. Scarlet Land (後書き)

ご意見、ご感想ありましたら是非。

既に4機目を撃墜していた魔理沙は、急上昇して強襲を仕掛けてきた咲夜と戦っていた。

第5世代機の一部にすら比肩しうるとまで言われる高い近接戦闘能力を持つF-2に対し、咲夜はハリアーの0度から98.5度まで可動させることのできる推力偏向式エンジンの機動力を活かしてほぼ互角の勝負に持ち込んでいた。

「ああもう、ちょこまか動き回りやがって！大人しく撃たせるんだぜ！」

魔理沙はサイドワインダーをフレアをまいて回避したハリアーに対しイラつきを隠す事無く言った。

「だあああっ！また避けやがった！」

一方、咲夜は咲夜で焦っていた。

(エンジンが……)

あの時、20ミリ機関砲弾は冷却用の脱イオン水のタンクを直撃していたのである。

(これ以上はオーバーヒートしかねない……せめて1機でも多く落としたいとかないと)

咲夜はあえて賭けに出てみる事にした。

それまでこちらの後方に回る事に終始していたハリアーが突然アフターバーナーを点火して距離を取った事に、魔理沙は向こうも決着をつけたがっている、と意図は比較的正しく察した。

急旋回して戻ってきたハリアーに対し、主翼付け根に装備されているM61バルカンを乱射し、更にフレアをまいて離脱。

咲夜の放ったミサイルはフレアの妨害にあって外れ、代わりに20

ミリ弾を浴びて機体は大きく損傷、戦闘不能に陥った。

「よし、止め……うわっ！」

止めを刺そうとしていた魔理沙は、突然の警報に慌ててチャフを展開してその場を離れた。

「……咲夜、これはどういう事かしら？」

賭けに負け、今にも止めを刺されようとしていた咲夜を救ったのは、彼女の主人にして今回の異変の元凶でもあるレミリア・スカーレットであった。

「侵入者一つともに追い払えず、逆に墜とされそうになってるか」

「……申し訳ございません、お嬢様」

F-14Dトムキャットに乗るレミリアは、咲夜を墜とそうとしていた魔理沙機に向かって、200kmにも及ぶ長射程の空対空ミサイル、AIM-54Aフェニックスを撃ちこんで従者を助けたのだ。

「ふん、まあいいわ。咲夜は先に戻っていなさい」

「いえっ、お嬢様自ら危険に身をさらさずとも、私共にお任せ頂ければ……」

「黙りなさい。足手まといなんかいらない、って言ってるのが解らないの？それとも、そんなに私を怒らせたいのかしら？」

聞く者に恐怖を感じさせるには充分な、冷ややかな声だった。

「……了解しました」

「……口振りからして、総大将のお出ましか？」

「ええ、私がこの主人、レミリアよ」

「さっきのミサイルからして相当な部下思いみたいだが、ひどい事言うねえ？」

「従者をどうこきつかおうと、私の勝手でしょう」

「これが噂の、ツンデレって奴か？」

「うるさい。人の従者傷付けてくれたんだから、主人から報復される覚悟はあるんでしょうね」

「なんだ、それが目的なら早く言えよ」

もういい加減見飽きてきた紅い塗装の後退翼の機体が突っ込んでくる。

「まあ何にせよ、墜とさせてもらっただけだな！」

2、3回回りあっただけで、魔理沙は相手が格闘戦が苦手だと判断していた。

「大した自信だから何れ程の奴かと思ったら、チョロいな・・・隙だらけだぜ！」

背後に回り込み、後は必殺の一撃を叩き込んで終わり、だと勝利を確信していた魔理沙は、

「……ってあれ、居ない？」

回り込んだ先に相手が居なかった事に戸惑った。

レーダーを確認してもそれらしい機影は見当たらない。

「何処へ消えやがった、あの野郎」

あの一瞬で消えたのなら、近くにいるはずだが、レーダーでは確認できない……。

「……そこかッ！」

魔理沙の確信の通り、レミリアはレーダーの死角、F-2の右斜め後方にいた。

「気付くの遅すぎ」

F-2は旋回を初めているが、レミリアの攻撃の方が早かった。主翼の付け根に装備されたサイドワインダーが発射され、フレアの妨害にも惑わされず命中、F-2を粉碎した。

トムキャットの特徴の一つ、20度から75度まで、速度に合わせて翼幅を最適化する可変翼を手動操作して、最初はさも格闘戦が苦手であるかのように振る舞い、ここぞという時に一気に回り込んだ、レミリアの作戦勝ちであると言える。

レミリアの友人であるパチュリー・ノーレッジとその使い魔の小悪魔の乗るF-4Jファントム？は、従者の借りを返しに行ったレミリアの代わりに紅魔館の飛行隊をまとめ、咲夜の抜けた穴を埋めに掛かっていた。

「……急に立ち直ったわね」

「アレのせいだな」

半ば逃げ腰となっていた敵への疑問を述べる霊夢に、妹紅がF-14DとF-4Jを指しながら答える。

「そう言えば、あのF-2の奴は知り合いだろ？さっき撃墜されてたぞ」

「……あの馬鹿、少しは粘って引き付けておきなさいよ。大変なのはこっちなんだから」

「慧音の方も、もう待ちきれないとか言ってたし、そろそろ決めに掛かるか」

「そうね、長引かせると面倒そうな連中だし」

「なら、私はあのファントムの奴を相手にしてくるぞ」

妹紅のファルコンは軽く翼を振ってその場を離れた。

機銃弾の歓迎を受けつつ紅魔館の飛行場に強行着陸したC-130輸送機から、数発の白煙弾が放たれ、門付近に固まっていた機銃陣地を煙に包む。

「無反動砲、撃てっ！」

慧音の命令一下、搭乗口や、操縦席の窓から突き出された84ミリ無反動砲が一斉に火を噴き、機銃陣地を中にいる妖精メイド達ごと粉碎する。

「総員着剣、白兵戦用意！」

飛行場の中には身を隠せる物など無いので、こうするしかない。

「突撃！」

銃剣を着けた89式自動小銃、M4カービン等を構えた団員達が突撃を開始する。

あっという間に門と柵を乗り越えた彼らは、小規模ながら反撃を加えてきたメイド達をさっさと排除すると、その勢いを駆って館内へ突入した。

飛行場付近の防衛がこれほど手薄だったのには、守備隊の大半が正門付近に回されていたからである。

二丁のニューナンプM60を両手に持ち、メイド達に向かって弾幕を張るチルノ、そしてその足元でもう二丁のM60の回転式弾倉に弾を詰めているリグル。

「このサイキョーのあたいに弾幕で勝とうなんて10光年速いわよ！」

「ちょ……チルノちゃんもつと頭低くして、危ないよ。それから光年は長さの単位だよ！」

「大丈夫、サイキョーのあたいに弾なんて当たらない！……あ、リグルちゃん、弾切れちゃった」

「はい、詰めおわったよ」

人間の子供程度しかない体格を活かして遊撃戦をしている妖精達を、
紅美鈴がメイド達を指揮して（飛行隊所属のメイド達と違い、警備・
陸戦担当のメイド達は、有事には美鈴の指示に従うよう訓練されている）なんとか前庭で食い止めているが、只でさえ少ない機銃・重
砲の大半をコブラに破壊され、館内・裏手の警備にも人手を割かれ
て兵力が不足している上に、飛行場方面からも大規模な攻撃を受け
て館内に侵入を許した、と言う緊急連絡を受けて、完全に紅魔館陸
戦隊の対処能力は飽和状態に陥っていた。

（もう降伏しても怒られないよね？私頑張ったよね？）

人手が足りないため美鈴自ら生き残った数少ないブローニングM2
に新たな12.7ミリ弾を補給しながら、その頭の中は泣き言と愚
痴でいっぱいになっていた。

（前からも後ろからも、いったいどうしろと言うんですか、あのち
びっこお嬢様は！）

館内警備担当のメイドの報告が正確ならば、館内に侵入した敵は2
00人近く、それだけで自分達の倍近い兵力である。

（それもこれも、あのちびっこ紫もやし、銀髪イエスマンのせい
だっ！）

航空戦力の拡充ばかり優先して、陸戦隊は後回しにしていたツケが
回ってきた、と言う事である。

現に、彼女らには野戦服一つ調達されず、皆チャイナ服、メイド服
のままで火薬の匂いにまみれながら戦っている。

美鈴は空を見上げ、

（結局敵は防げてないし、これが終わったらあの銀髪メイドに蹴り
入れてやる……）

とりあえず白い布を探す事にした。

撃墜されたF-2から脱出し、そのままこっそり紅魔館の中に潜入

していた魔理沙は、T字になっている廊下を歩きながら、何処かに掘り出し物はないか物色していた。

（これだけ苦労したんだから、何か一つくらい自分へのご褒美を持って帰ってもバチは当たらないと思うんだぜ）

彼女のイメージカラー、黒を基調としたパイロットスーツと、トレードマークの山高帽を被り、直感を頼りに廊下を進んでいく。

「何も無い……しけてんな」

「悪かったわね」

「全くだぜ……って、誰だよ？」

突然背後から返事を返された魔理沙は振り返ろうとしたが、

「動かないで」

自分の首筋に、銀色に輝く刃を添えられている事に気付き、やめた。

「誰？」

「侵入者に、それを名乗ってあげる義務は無いと思うけど……十六夜咲夜よ」

「咲夜さんよ、侵入者だなんて人聞きの悪い言い方やめて、お客様って呼んで欲しいんだぜ」

「これが紅魔館流の歓迎よ」

「……背中ががら空きだぜ、なあ霊夢？」

勿論ここで咲夜が慌てて振り向くような馬鹿な展開は起こるわけが無いが、少なくとも注意をそらせるのには成功した。

素早く振り返った魔理沙が、咲夜の右腕を捻り上げ、ナイフを奪った。

「何引っ掛かってるんだぜ？」

咲夜は苦痛に一瞬顔を歪めるが、その場から側転の要領で距離をと

り脱出、その際に魔理沙の手元からナイフを蹴り上げる。

素早く起き上がりながら、虚空に舞ったナイフを回収しようとする
咲夜に対し、

「させるかっ！」

飛び蹴りを放つ魔理沙。

蹴りはかわされたが、ナイフの回収は阻止した。

「らあっ！」

咲夜に飛び掛かりながら左拳を振りかぶる魔理沙に、

「甘い」

同じく左拳を構えた咲夜のクロスカウンターが決まる。

顎を打ち抜くクリーンヒットとなった一撃により、のびてしまった
魔理沙と、その処理に悩む咲夜。

数分間悩んだ咲夜の頭に、主人の妹の姿が浮かんだ。

「ああ、そう言えば、妹様が新しい遊び道具をご所望だったはず」
手近なメイドを1人捕まえると、魔理沙を地下室へ放り込むべく2
人で運び始めた。

紅魔館上空。

霊夢とレミリアは一騎討ちの最中だった。

イーグルの高い戦闘力で、半ば力づくで追い詰めようとする霊夢に
対し、可変翼の制御を自動に切り替え、トムキャットの長所を如何
なく引き出して翻弄するレミリア。

お互い決め手がないまま、ぐるぐると回り続けていたが、途中参加
であるレミリアよりはるかに長時間戦い続けている霊夢の方が先に
集中力が鈍るのは明らかである。

一瞬の気の緩みから、背後に回る事を許してしまった霊夢は、即座に急降下を開始し、レミリアを振り切ろうとする。

水面ギリギリで機体を引き起こし、アフターバーナーを点火し急上昇に移る。

純粋なエンジン出力で劣るトムキャットはイーグルの機動について行けず、元の高度まで戻ってきた時には大きく引き離されていた。

今まで背後を取られる恐怖から、思いきった行動に出れず膠着状態になっていたが、集中力切れが良い意味で裏目に出たのである。

既に視界外にまで引き離されてしまったレミリアは、イーグルに対しスパローを発射。

引き離れた後に旋回して戻ってきた霊夢もスパローを二発、撃ち返す。

AIM-7スパローはセミアクティブ・ホーミング・ミサイルであり、発射後は命中まで母機のレーダーからの誘導が必要であり、母機はその間、動けない。

お互いにスパローを撃ち合った事によって起こったチキンレースに敗れたのはレミリアだった。

レーダー照射を止め回避行動に移ったため、レミリアの放ったスパローはイーグルを僅かにそれ、霊夢の放ったスパローは、チャフの妨害に1発が回避されたが、2発目のスパローは命中した。

ミサイルを喰らったトムキャットの機体はボロボロになり、飛んでいるのがやっと、の状態だった。

「で、まだやるの？」

霊夢は通信で呼び掛ける。

「やるつもりなら、気の済むまで撃ち込んであげるけど」
先程のスパローでミサイルは撃ち尽くしたが、右主翼の付け根には20ミリ機関砲と手付かずの砲弾約900発が残っている。

「……いえ、これまでみたいね。諦めさせてもらおうわ」

レミリアには紅魔館勢の戦況が逐一報告されていた。
戦闘機隊は壊滅状態、陸戦隊も白旗を上げている。

これ以上戦っても勝利を得られる可能性は無く、ここらが潮時だろう、との判断である。

「（まあ、捲土重来の為に戦力はあるべく温存したいし）」

「そう。他の連中にも伝えといて」

STAGE 3. Sister of Scarlet

「……何処だここ？」

「あっ、やっと起きた」

魔理沙は紅魔館の地下室の床で目を覚ました。

暗い周囲を軽く見渡し、自分の右足首に鎖が繋がっているのを見てため息をついてから、声の主に向き直った。

「此処はどこ、お前は誰？」

「フランドール・スカーレット。フランでいいよー」

「そうか。私は霧雨魔理沙。魔理沙でいいぜ……ところで、私はこの館から帰りたいんだが、この足枷外してくれよ」

「やだ」

「いや、そんな満面の笑みで言われても」

「フランは退屈なの。マリサが遊んでくれるまで帰らせない」

何でだよ、と言い掛けた魔理沙は、暗闇に目が慣れてきた事と相まって、周囲の状況がようやく理解出来た。

人間の目のような形をした牢獄。

目のフチにそって鉄柵があり、白目に当たる部分に足場がある。

黒目の部分には何か黒い液体が満たされていて、その中央には一段高い台座があった。

なお、台座には穴が開いており、足枷の鎖はそこへ伸びていて、もう一端はフランの足首に繋がっていた。

「タールだよ。よく滑るから気を付けてね」

フランが頼んでもいないのに、するとも言ってない遊びのルールを説明しはじめた。

「私とマリサが、この中で戦って、先に相手を壊した方が勝ちだよ。此処から出たかったら、私に勝つ事。」

武器はいくらでも使って良いよ。台座に登れば取れるから」
見れば、天井から大量の刃物がぶら下がっている。

カギをちらつかせながら説明するフランに、魔理沙も立ち上がり、戦う決心を固めた。

「これにしょーっと」

フランが天井から一本の長剣を取る。

魔理沙は刀剣の事などよくわからないので、適当にレイピアを選んでいた。

「じゃあ、ゲームスタート！」

いきなりフランは足を思い切り引く。

2人の足首は鎖で繋がっているのだが、当然魔理沙が引っ張られる。

それも、見た目からは全く想像出来ない馬鹿力で。

「うわわわわっ！」

無様に転んで尻餅をついた魔理沙に、台座を飛び越えてきたフランが剣の切っ先を向けて迫る。

「あぶねっ！」

右へ素早く転がって避け、立ち上がる。

この時点で魔理沙はタールまみれで真っ黒になっていたが、空戦時とは比べ物にならない程、死の危険が身近に感じられる状況でそれを気にする余裕は無かった。

「てえいっ！」

「よっと」

野球の金属バットのようなスイングでレイピアを振るが、反対側か

ら振り返ってきたフランの剣とぶつかり、レイピアが折れてしまった。

「……え？」

「駄目だよマリサ、レイピアは振って使う剣じゃ無いよ、ほら、こ
うやって」

「うおっ!？」

「突いて使う剣なんだよ」

フランの刺突を身を捻ってかわし、足を振り上げてタールをフラン
の顔目掛けてぶちまく。

「わわっ!？」

その隙にフランの横をすり抜けて台座に登る。

魔理沙が新たな武器として、たまたま近くにあった刀を手にした時、
自分の足に衝撃を感じ、そのままバランスを崩して前方へ倒れ込ん
だ。

「痛えっ!？」

見れば右太股に先程のフランの剣が突き刺さっている。

台座に登った魔理沙に向かって、フランが剣を投げ付けたのだ。

そのフランは、台座に登り新たな武器として手にチェーンソーを持
っていた。

「すごい、私に反撃してこれたのはマリサが初めてだよ!」

無邪気を通り越して狂気となった笑みを向けながら、

「マリサは強いんだね!じゃあ私も本気で行くよ!」

とチェーンソーの不気味な駆動音を響かせながら言った。

(どうするんだぜ、このままじゃ殺られちまう)

刀を杖代わりにして、右足を庇いながら何とか立ち上がった魔理沙は、痛みを訴えている、剣の刺さったままの己の右足を見て、ふと考えが浮かんだ。

（賭け……じゃねーな、何が何でも成功しないと私に明日は無いぜ）
決心した魔理沙は左足の力だけで飛び上がると、刀を大上段から振り下ろす。

「ざーんねん！」
フランは右に構えたチェインソーを左に振り抜いて弾くと、そのまま返すように右へ振る。

「惜しかったね！」
「それはこっちの台詞だぜ」

見れば魔理沙の手にはもう一本剣が握られている。
自分の右足から引き抜いたフランの剣を持ち、片手で柄を押さえて刺突の構えをとっている。

振られたチェインソーが魔理沙の右脇腹をえぐるが、その痛みに耐えて剣を突き出す。
突き出された剣先はフランの喉を捉え、貫いた。

とたんにフランの体から力が抜け、チェインソーを取り落としたのを見届け、魔理沙は激痛に意識を手放した。

「あつ、やっと起きた」

「……またこのてんじよ、痛っ!？」

「駄目だよ動いちゃ。せっかく咲夜が手当てしてくれたのに」

また例の地下室の床で目覚めた魔理沙は、自分が手当てされている事に気付いた。

「てかフラン、お前喉切ったのに何で平気なのさ」

「私は吸血鬼だから、首切られたぐらいじゃ死なないよー」

「いや、だから満面の笑みで言われても……」

「マリサは凄いな、私負けちゃった！でも楽しかったよ！」

「……そうかい」

「マリサ、これあげる！私に勝ったご褒美だよ！」

フランが渡してきたのは、魔理沙の右足に刺さった例の長剣とその鞘である。

「ありがとう」

「失礼します」

地下室のドアをノックする音が響いた。

「あー、咲夜だ」

入って来たのは十六夜咲夜だった。

「迎えが来てる」

咲夜は魔理沙に向けてそれだけ言うに出ていった。

「じゃ、そういうことらしいから、私はこれで帰るぜ」

よっこらしょ、と魔理沙が身を起こしたが、右足がまともに動かない事を思い出し、先程もらった剣を杖代わりにして歩いた。

「酷い怪我ね」

魔理沙を迎えに来たのは霊夢だった。

「何だ、霊夢だったのか。わざわざ来てくれるなんて嬉しいな」

「あなたの知り合いで、迎えにこれるのが私しか居なかったのよ…
…面倒この上ないけど」

「悪いな、今度賽銭入れに行ってやるんだぜ」

「賽銭箱にキノコ入れるのは勘弁してちょうだい」

「バレてたか」

その後、紅魔館の一室。

「まさか負けるとはね」

特大絆創膏の張られた頭を擦りながら、レミリアが言う。

「申し訳ございません、私共がもっとしっかりしていれば……」
レミリアの前で膝をついている咲夜が、涙混じりに謝っている。

「しっかりしていない咲夜達には罰を与えないとね」

罰、という単語に身体を震わせて反応する咲夜。

「はい……この上は如何様な処罰でも……」

「後100年、私に絶対の忠誠を誓ってもらう。それが罰よ」

「……えっ？」

「二回も言わせないで。後100年ギリギリ働きなさい」

「……お嬢様！」

先程とは一転、希望にみちあふれた顔をした咲夜はレミリアにとり
すがって泣いていた。

ちなみにレミリアの頭は、慧音による手加減容赦一切なし、本気の
頭突きによるものである。

「これでもう、お互いに恨みっこなしね」

の慧音の言に自警団の団員達は皆納得して、人里への帰途についてのである。

大妖精ら湖周辺の妖精、妖怪達も、紅魔館の連中に頭を下げさせた事に満足したのか、また元通りの生活に戻った。

ちなみに使用した武器類は全て魔理沙から改めて贈与された。

空を覆っていた紅い霧も晴れ、幻想郷にはまた平穏で退屈な日常が戻ったのである。

STAGE 3. 5. Afterwards

紅い霧に覆われた夏からはや三月、幻想郷には冬が訪れつつあった。あれから紅魔館では、湖周辺の妖精達との和解を済ませ、彼女らの協力の下、館の増改築工事が行われていた。

その工事の一環、館の正門前と湖の岸の一角を直線で結ぶパネル橋（複数枚のパネルを連結させてつくる簡素だが丈夫な橋）を1台の黒いオートバイが渡り、館の外壁に立て掛けて停められる。

03式自動歩槍（人民解放軍ではアサルトライフルの事を歩槍と呼ぶ）のストックを地面に付け、銃口の上に両手掌を重ね、帽子を深くに被って立っていた美鈴は、その来訪者に気付くと、ゆっくりと眠そうに顔を上げた。

「……ああ、魔理沙さんですか、こんにちは」
来訪者とは霧雨魔理沙の事である。

「まだ朝だぜ」
その言葉に美鈴は、館の塔の外壁に掛けられている大きな時計を見やり、

「……早く起きすぎてしまいましたか」

「門番として、その台詞はどうかと思うぞ」

「寝てなきゃやってやれませんよ」

「また何かあったのか？」

「朝から夕方まで私一人で警備ですよ？夜間はメイド達が2人一组で、しかも一時間で交代なのに」

「また凄いシフトだな」

魔理沙は苦笑する。

「何で私だけこんな重労働なんですか？私の心は不平不満ではち切れそうですよ」

「……」

「せめてもの救いは、久々の休暇が3日後にあるくらいです」

「よし、ならその日私と付き合えよ」

「……えっ？」

「知り合いにな、ちょっとした妖怪退治を頼まれてんだ。数ばかりで対した事ない連中みたいだから、美鈴なら良い気晴らしになると思うぞ」

「良いんですか？」

「良いぜ、どうせ私一人じゃ面倒だしな」

「あっ、それでしたら、もう一人呼んでも良いですか？」

「……報酬は山分けだからな？」

「鬱憤晴らしになるなら、それが一番の報酬です」

「……そうか」

「図書館で司書をやってる子がそうですから、一度会ってきてください」

「ついでにな」

「と、言いつつ真っ先に来ちゃった」

魔理沙が初めて足を踏み入れる紅魔館の図書館は薄暗く、とてつもなく広い。

「……壁と天井はどこだ」

果てが見通せない程広い空間に、ぎっしりと本が詰められた本棚が等間隔で並んでいる。

「……ちよつとぐらい持ってたって、ばれないよな」

誰にでも無くつぶやき、早速本の背表紙を確認し始めた魔理沙の耳に、背後から何者かがささやきかける。

「持ってくなら、私の許可をとってからにしてね」

「うおっ、びっくりした……誰だ？」

「パチュリー。図書館は私の部屋よ」

「魔理沙だぜ……ここの司書ってのはパチュリーの事か？」

「司書はあっち。館内では静かにね」

「わかってるって」

一段高いカウンターの上でぼんやりと座っている小悪魔に、魔理沙が近付く。

「よっ」

「……貴方は、さっきパチュリー様と話していた……」

「魔理沙だぜ」

「魔理沙さんですね。それは貸出希望ですか？」

「やっぱり、ばれてたか」

「わざわざ服の下に隠さなくとも、堂々と盗んでいけば良いですよ」

「……良いのかよ？」

「どうせパチュリー様は記録なんて見向きもしませんよ。つまり私さえ黙ってれば盗み放題です」

「お前、あのパチュリーとやらの恨みでもあるのか？」

「……あの本の虫と化して一日中、いや年中図書館に引きこもっているあの人に付き合わされる側としては、たまったものじゃありません……知ってます？向こうの本棚の陰に空きスペースがあるんですけど、そこにあの人用のベットとクローゼットにワインセラー、しかもシャワールームまで完備してあるんですよ」

「こんな薄暗いところに年中引きこもりとか、私なら発狂しかねん」「ですよね！……私だってたまにはさわやかな外の空気を吸いながら、思う存分はしゃぎたいです」

「……そこで提案なんだが」

魔理沙は美鈴と同じ事を小悪魔にも伝える。

「予定空いてるか？」

「勿論、抜けだします」

にやり、とした笑みに変わった小悪魔。

「そうこなくちゃ」

「……寒いわね」

「この程度、私は平気だが」

雪がちらほらと降り出した人里。

慧音宅の居間で妹紅―（同居）と霊夢―（遊びに来た）の2人は炬燵で緑茶を啜りながら将棋に興じていた。

「私は寒がりなのよ、六七桂」

「まあ、あの神社じゃな。四六銀」

「全く、あれじゃ吹きさらしも同然。四三步」

「おっと、攻めてきたな、同飛」

「四六金」

「なにを狙ってる？……同歩」

「これよ。五五桂打、王手」

「なに、同歩」

「同桂。王手」

「しまった、そこにもいたか……しかも王手飛車取りだど？」

「そういう事。さあ、どこへ逃げるのかしら？」

「はめられた……この飛車の仇は必ず取ってやる」

「ところで話は変わるが今、この夏に消耗した戦闘機を補充中なんだが、機種はF―16Aで決まった」

「良いんじゃない？使う機種は統一しといたほうが楽でしょうに」
霊夢はどうでも好きそうである。

「しかも隊長機はF―16AからF―16ADFへ改修される」

「なにがどう違うの」

「中距離空対空ミサイルが積める」

「へえ、それで？」

「しかも専用にA I M—120Cまで買い込んでくれるみたいだし」
「……つまり、私に将棋で勝てそうにないから、空戦で勝とうとしてるわけね」

「という事で霊夢、改修が終わり次第模擬戦を挑む」
「だが断る」

キリッとても効果音が付きそうな顔で霊夢は拒否した。

「この寒いときに面倒なことなんてしたくないわよ」

「……そういうケチで益にうるさいな面さえなければ、今頃神社は嫁の貰い手と賽銭であふれているだろうに」

「ケチで独身上等。あのイーグルだってすごい高かったんだから」

「購入費用の半分は里が負担した覚えがあるが」

「購入費用とケチとは関係ないでしょ。はい、これで詰み」

「それもそうだな……って逃げ場ないじゃん！？……よし、もう一局だ！」

「相変わらず負けず嫌いね」

「霊夢の執念深さには勝てそうにないな」

「良いわ、何局でも叩き潰してあげる」

STAGE 4. Spring of silvery white

「お早う御座います、お嬢様」

早朝、いまだ深く雪の積もる幻想郷。

「……おはよう、咲夜」

凍った湖面の中に立つ紅魔館でも、屋根では複数のメイド達（美鈴含む）が雪かきに勤しんでいた。

「紅茶です」

「ありがとうございます、最近是一段と冷え込んできたわね」

室内であるにもかかわらず白い息を吐ける部屋で、湯気の立つ紅茶を口を含むレミリア。

「いえ、管制に問い合わせたところ、気温自体は少しずつ上がり始めています」

「春にはあとどれくらいかかりそう？」

「えっと、今のペースでは雪解けまでは約一月半、らしいです」

「…雪解けでそれなら、春には三月はかかりそうね」

「その事なのですが……実は、もう暖房用の燃料が」

言いにくそうにする咲夜に、やっぱり、とでも言いたげな顔のレミリア。

「それで暖房の効きを抑えてるのね、道理で寒いはずよ」

「申し訳ありません、今年の冬が予想以上に長引き……」

「燃料はあとどれくらい持ちそう？」

「えー、二週間が限界かと」

「二週間ね」

レミリアはその表情を真面目なものに一変させ、

「咲夜、貴女は何故まだ冬が明けないと思う？ 普通ならもうとつくに春になっていて、桜も散っているだろう時期なのに」

「…何者かが、異変を起こして冬明けを遅らせているから、ですか」

？」

「それもありうるわね。たんなる異常気象でもこれほど冬が長引くのはあり得ないわ」

「…しかし、何の目的ででしょうか？」

「それを二週間で調べて来なさい」

「…了解しました。必ずや異変の元凶を突き止めて見せます」
「頼りにしてるわよ」

「霊夢の事だから、もう雪にはうんざりしてるよな」

人里から外れやや東。博麗神社（霊夢自宅）

隙間風がよく入る、無駄に広い居間に霊夢、妹紅、慧音の三人が向かい合って座っていた。

「そこで、霊夢に仕事の依頼だ」

妹紅の言を慧音が引き継ぐ。

「このいつまでも明けない冬について、貴女に調査を頼みたい」
慧音がそう言って懐から封筒を霊夢に差し出す。

「・・・まあ、私も寒いのは大嫌いだし、ちよつと調べてくるわ」
封筒の中身を確認して、口角をわずかに釣り上げ、快諾する霊夢。
手を叩いて満面の笑顔を作り、妹紅が霊夢を称賛する。

「さすが、霊夢！滑走路の雪かきはもう殆ど終わってる頃だろうか
ら、いつでも行けるぞ」

「ま、この博麗の巫女に任せておきなさい、という事ね」

「頼むぞ、私も竹林の方の家に行けなくて困っているんだ。多分埃
がすごい事になってる頃だと思う」

妹紅は元々里から離れた“迷いの竹林”と呼ばれる場所で暮らして
いた。

慧音と出会い、彼女を気に入ってから人里に移ってきたが、その
時の家はまだ残しており、夏場などにはよく避暑に利用している。

「はいはい。じゃ、行ってくるわ」

「……まいったな」

時同じくして、一面銀色に染まった上にたたずむ魔理沙。

人のほとんど立ち入らない森の中に住む魔理沙にとって、今回の異常な冬は主に食料面での危機を彼女にもたらししていた。

食料自体は十分にあるのだが、無限ではない。

一向にあける気配を見せない冬の前に、異常気象の調査も兼ねてあえて打って出た魔理沙を待ち構えていたのは、方向感覚を惑わす全く変化の無い雪景色といまだ一枚の葉もつけない木々であった。

そしてうろうろと数時間も歩いているうちに森を抜けてしまい、小さな山にたどり着き、

「……こんな大物の猪なんて初めて見たぜ」

現在に至る。

向こうもこの冬で相当腹をすかせたのだろう、全身から闘争心をあらわにしている。

魔理沙と平行に目線を合わせられるほどの巨躯。

「おいおい、こんなやせ形の私を食っても骨ばかりで美味くないぞ・

・・」

ブルブル、とうなる猪に携行してきた一〇〇式機関短銃を向けると、足元に軽く8ミリ弾をばら撒き牽制、

「じゃあな！」

背を向け逃走を図る。

数十分後。

「……冬の雪山は遭難しやすいんだぜ」

逃げ切れたは良いものの、疲れ切り、適当な岩陰に避難した魔理沙。

「？」

外を覗き込んだ魔理沙は岩肌に付着している桜の花びらを見つけた。

「桜？…風向きからして、向こうから飛んできたみたいだな・・・
行ってみるか」

霊夢は毎度の如く己の勘を信じて愛機を飛ばしていた。

飛んでいるうちに雪も止み、機内からではわからないが心なしか暖かくなった気がする。

でもやっぱり寒いものは寒い。

「ああ、寒い！いい加減にしてほしいわ」

「…春眠暁を覚えず、かい？」

「…？」

飛び上がり、霊夢の前方に陣取った一機のY a k－141フリース
タイル。

「人間は冬の間くらいおとなしく冬眠でもしてなよ、哺乳類なのに」

「…冬眠するかしないか、哺乳類であるかどうか、この二つは関係
ないわよ」

「冗談。貴女が春を取り返しにきた事ぐらい私にもわかる事よ。つ
まり幻想郷中の冬好きの敵ね」

「取り返す、って事はやっぱり誰かが盗んでいった、って事ね。情
報ありがと、そしてさよなら。仕事中の私に出会ったのが運の尽き
よ」

「それは貴女よ・・・それから、名のり忘れたけど、私はレティ・
ホワイトロック。よろしくね」

霊夢のイーグルは敵機の右側へと旋回しながら右主翼の20ミリ機

関砲を撃ち掛ける。

レティはフリースタイルのリフト・エンジンを吹かして上昇、これを軽くかわす。

その後、お返しとばかりに30ミリ弾を撃つが機体を左へ横滑りさせた霊夢にかわされた。

「悪いけど、黒幕がいると解った以上、あんたみたいな下っ端にかまってやる弾薬も燃料も時間も勿体無いから…」

イーグルがまるで体当たりでもするかのように猛然と突っ込む。

「手荒なやり方で落とさせてもらうわよ」

レティはそれを避けようと旋回を始めるが、その隙をつかれ霊夢に背後を取られる。

「くッ…」

「無意味よ」

撒かれたフレアを無視し、20ミリ弾がフリースタイルの機体を貫く。

「じゃあね」

被弾し、大きくバランスを崩したレティと機体を一瞥し、霊夢は去ってしまった。

「あらら、こうもあっさり負けるとはね」

桜の花びらが飛んできたと思しき方向へ足を進めていた魔理沙はまた森へ戻ってきてしまっていた。

「…やっぱり、住み慣れた森の方が居心地が良いぜ」

少し活力を取り戻した魔理沙の前に、一軒の家があった。

冬で木々の葉が落ち、見通しが良くなっているため見つけられた。

「……あら、こんな時期に來客かと思えば、ただの迷い込んだ田舎者だったのね」

その家の庭先の人影が魔理沙のほうに近付いてくる。

「初対面の人間への第一声为上から目線で“田舎者”とは……駄目になって無いな。どこの温室育ちだ？」

「温室じゃないわ。“都会派”と言いなさい」

「へいへい都会派さん。こんな田舎にようこそだぜ」

「全く、なんで田舎の春はこんなに寒いのかしら？ 田舎者でしょ、なにか知ってる？」

軽く皮肉を混ぜたつもりだった言をスルーされた事に少しショックを受けた魔理沙。

「悪いが、今調査中だ」

「役に立たない奴は決まってそう話をはぐらかすわ」

相変わらずの上から目線にやや苛立つが、ぐツと抑える。

「……そもそも、お前誰だよ？」

「人に名を尋ねるときはまず自分が名乗るもの。都会では常識よ」

「此処はお前の言う“田舎”なんだがな……まあ良い、私は人間の霧雨魔理沙。この森に住んでるぜ」

「アリス・マーガトロイド。都会派の魔法使いよ……貴女も森の住人だったのね」

「そうみたいだな」

アリスはややためらいがちに言った。

「近所に住んでいる者として、ある程度の親交ぐらいは持ってあげてもいいわよ」

意外な申し出に驚くが、同時にこれは反撃のチャンスであると感じた、これまでアリスに会話の主導権を握られっぱなしだった魔理沙が軽く笑う。

「私は田舎者だが良いのか？」

「真の都会派はね、相手を差別しないものよ！たとい田舎者であろうともね。で、どうなのよ？」

自信満々に胸を張って返答を待つアリス。

「……アリスはその性格がたたって今まで友達ができた事が無いとみた。どうだ？」

「！！」

ようやく決まった反撃に会心の笑みを浮かべ、逆襲を始める魔理沙。

「それで、どうしても友達が欲しくてたまらないが、プライドが邪魔して自分から頼むのが嫌だったんだろ？」

「…失礼ね、私にだって友達ぐらい」

「いるのか？じゃあ名前挙げてみな。ただし、『知り合い』じゃなくて本当に心を許せるような相手に限るぞ」

「…」

「だが安心しな。私は田舎者だからな、誰とでも友達になれるぞ？」

「……それで、さっきの返事はどうなったの？」

「勿論OKだが」

「上から目線ね。なんか納得がいかないわ」

「最初は誰でもそんなもんだ。時間が解決してくれるさ」

「…」

「ところで、なんで今年の春が極寒なのか疑問に思ってただろ？」

「ええ、異変ね」

「調査中だが、アリスも来るか？」

「……何言ってるのよ」

「？」

「今から私がこの異変を調査に出かけるから、魔理沙もついて来な

「さー！」

「……素直じゃないな」

STAGE 5. Night of doll settlement

「魔法で操作してる、私特製の半自動人形達よ」

「凄いいんだな」

「定期的に指示し直さないといけないけど、便利なものよ」

「是非一家に一つ欲しいな」

「取り敢えず、そこに座ってなさい」

調査の準備のために家に入ったアリスと魔理沙を人形達が迎えた。
これ以外にも、屋根の上で雪かきをしている物や、キッチンで湯を沸かしている物、掃除をしている物と多岐にわたり、魔理沙が軽く数えただけでも総数は20を超えている。

アリスが運んできた紅茶とクッキーを一口ずつ味わった魔理沙が感嘆する。

「へえ、美味しいな。金取っても良いんじゃないか?」

「じゃあ魔理沙から取り立てようかしら?」

「出世払いで良ければ」

「何をもって出世とするのよ」

「私は魔法使いになりたくて修行中の身だが、その修行が実を結んだ時だな」

「貴女魔法使い志望なの? なら私が先輩として指南しても良いわよね?」

「そうだな……後10年経って何の成果も無かったら泣き付きに来るぜ」

「楽しみにしておくわ」

「ところで、調査に行くったって、足はあるのか？また雪山登山は勘弁してほしいぜ」

「……そうね、じゃあお茶飲み終わったら行きましょ」

「……忘れてたな、お前」

家の裏手にある倉庫で暗証番号を打ち込みロックを解除、シャッタ―が上がり電気を点ける。

「……まさか、これに乗れと？」

2人の目の前には明るい水色の塗装の施されたフェラーリF430が鎮座していた。

「そんなわけ無いでしょ。これは飾って楽しむものよ」

「だよな。この高級車独特のオーラに気後れして乗れやしない」

「使うのはこっちゃよ」

「……これはまた珍しい機体を持って来たな」

フェラーリの置かれた場所から更にドアを一枚くぐった先には、人形達により整備が行われたV-22オスプレイがあった。

「私は戦闘機の操縦経験は無いけど、ヘリとかの扱いなら自信があるわ」

「それは頼もしいな。私は戦闘機と練習機しか乗った事が無いんだ」
「任せておきなさい」

アリスと魔理沙、他に戦闘用の武装人形16体が乗り込んだオスプレイが二基のターボシャフトエンジンの轟音と共に離陸し、回転翼を水平に倒して水平飛行に移る。

「航続距離には余裕あるし、まずは適当に飛んでみましょうか」

「そうしようぜ」

「……おい、アリス。見てみる!」

「どうしたのよ」

「あそこ、桜が咲きかけてるぞ!」

飛び始めてから約二時間。

双眼鏡で外を見渡していた魔理沙が、山の一角がピンク色に染まっているのを発見した。

「……ええ、見えたわ。どうする?」

「どうって、行くに決まってるだろ」

「OK」

「……アリス、思いっきり高度を下げろ!」

「今度は何!?!」

「いいから急げ!」

アリスが操縦桿を倒しオスプレイを下降させる。

高度を落としながら魔理沙に問う。

「何があったのよ」

「戦闘機が二機。さっきの桜のところで争ってる……ほら」

魔理沙に手渡された双眼鏡を覗き、先ほどの桜を確認すると、確かにその上空で飛び回るMiG-23フロッガーとその背後に食らいついているMiG-29フルラムの姿が確認できた。

MiG-23はスピードと中々遠距離での戦闘能力を重視して設計されており、近接格闘戦においては特にロール率が悪く、旋回方向を素早く変更できない等、様々な問題がある。

反面MiG-29の機動性は非常に高く、格闘戦となれば後者が圧倒的優位な立場になれるのである。

「あのフロッガー、見覚えがあるぞ」

「ええ、私もあるわ。あの春告精の機体よね」

MiG-23は春告精、リリーホワイトの愛機として知られていた。その名の通り毎年春が近付くとそれを告げるべく、愛機を使ってビラマキ（春に咲く花の花びら）をやる事で有名だった。

「じゃあ、あのファルクラムは誰の機体だ？」

「私は知らないわね。でも、彼女が戦ってるのは何故かしら？元々そんな好戦的な性格ではなかったはず」

「……もしかして、あの桜を守ろうとしてるのか？」

「……じゃあ、あのファルクラムのパイロットが春を集めていて、リリーホワイトがそれに抵抗している？」

「それも考えられるな。あのパイロットから手掛かりを得たいが、こっちは輸送機。巻き込まれるのは御免だ、早急にこの場を離れるぞ」

「そうね……って、あの二機、こっちに気づいてる？」

フロッガーが背後のファルクラムから何とかして逃れようと急降下をかけ、その際に低空に避難していたオスプレイに気付いてしまった。

「……逃げろ！」

「言われなくても！」

オスプレイは全力を出せば最高時速565キロという、回転翼機としてはとても優れた速力を持つが、戦闘機相手では全く意味が無い。そこで回転翼の角度を水平から垂直に変更し、ヘリ本来の機動を行う。

時速200キロ足らずの低速と超低空での地形追従飛行を合わせる。これにより地表や障害物に紛れてレーダーでは探知は難しく、またジェット戦闘機では間違いなく失速する低速のため追尾も困難となる。

しかしこの航法ではその場しのぎにしかならず、離脱する方法を探して機内では通信機器を操作し、近隣に救援を求められる相手がないか探していた。

「…つながった！」

発信した電波の一つが偶然にも近くの航空機に受信されていた。

「アリス、貸せ！」

通信機から流れた相手の声に聞き覚えのあった魔理沙がアリスから機器をひったくった。

「咲夜か!？」

「…その声、霧雨魔理沙？」

通信に応じた相手は、霊夢や魔理沙に先だって異変の調査に赴いていた紅魔館のメイド長、十六夜咲夜であった。

「細かい話は後だ!今“魔法の森”の付近だ、来れるか!？」

「………すぐに向かう。少し待ってなさい」

オスプレイの頭上を飛び越え上昇に移ったフロッガーは意を決したように機体に可能な限りの加速と急旋回を行いファルクラムに向き直り、そのまま両機は数度交差する。

やはり格闘戦性能に勝るファルクラムが再び背後を取りミサイルを放つ。

フロッガーは回避できずこれを喰らい、爆散する。

「おい、アリス、まずいぞ」

「わかってるわよ!」

更に高度を下げ、地表スレスレを飛ばす。

「レーダーで森付近に機影を確認した。貴女で合ってる？」

「…いや、違う！そいつは今回の異変の実行犯だ！」

「了解。攻撃を開始するから、離れてなさい」

前回の“赤霧異変”の際に損傷し、修理改修も面倒であったため新規に購入し直した咲夜の新たな乗機A V-8 B ハリアー？の翼下に装備されたA I M-120 アムラーム中距離空対空ミサイルを発射する。

照準の際に照射されたレーダー波を探知したファルクラムが回避行動に移る。

ばら撒かれたチャフにレーダー波を攪乱された咲夜も早々にアムラームの誘導を打ち切り、ファルクラムとの距離を詰めにかかる。

咲夜が魔理沙達から引き剥がしたファルクラムに通信を試みる。

「…さて、貴女が異変の実行犯だという話を聞いたけど、本当かしら？」

数秒間の沈黙のうち、返事が返ってきた。

「確かに、実行犯と言われればその通りです」

「じゃあ、何の目的で春なんか集めるのかしら？」

「西行妖に封印さいぎょうあやかしされているとある方を復活させるためには、ありつたけの春を集めて西行妖を満開にしなければいけないんです」

「…：やけにあっさりおしえてくれるのね」

「お願いですから、邪魔はしないで頂けませんか？あともう少しなんです」

「内容にもよるわ。その『とある方』とは誰？復活することで何がどうなるの？…：封印されていた、という事はそれなりの理由があって封印されていたんでしょうに」

「私は知りません」

「……？」

「私は何も知りません。ただ幽々子様の言に従うだけです」

「主人の命令だから、何も疑いすらせず遂行する。貴女、私と気が合いそうね」

「こっちとしては、貴女のような方は願ひ下げですね」

「あら残念。せめて、貴女と主人の名前ぐらいは聞いておこうかしら」

「……魂魄妖夢^{こんぱくようむ}。お嬢、西行寺幽々子様の邪魔をするなら容赦はしませんよ」

「その正直で隠し事が苦手そうな所、好感が持てるわ」

「無駄口叩いてる余裕があるなんて羨ましいですね」

「これぐらいの優雅さが無ければ良い従者にはなれないわよ」

「余計なお世話です！」

ハリアー？とファルクラムが互いにレーダー波を照射、戦闘が始まった。

STAGE 6. Perfect Cherry Blossom

「……実は今まで飛び続けてきたおかげで燃料が心許無いのよね」

「心配せずとも、直ぐに叩き落としてあげますよ」

「そう？じゃあ落としてみなさい」

ハリアー？の速力ではファルクラムには遠く及ばないため、咲夜自身
の得意戦法でもある低空での格闘戦に引きづり込もうとする。

ファルクラムの下を潜り抜けるように降下するハリアー？に、出遅
れたため追いつけないファルクラムがいったん降下して急加速し、
そのまま再び上昇しながらハリアー？を追いつける。

咲夜はハリアー？の機動を水平に戻し、そこから右マイナス45度
バンクし右斜めスライスバックの下方宙返をかけ、自機のやや上を飛ぶファルクラ
ムとすれ違いざまに今度は右45度シヤンデルの上方宙返をかける。

背後に付かれる事を防ぐために妖夢が自機を左へ急旋回させ、再び
両機がすれちがう。

「悪いけど、そこは射程内よ」

ハリアー？の四基の推力偏向ノズルの向きを変更、機首をファルク
ラムの方へ向ける。

主翼下のサイドワインダーが放たれファルクラムの機体に突き立ち、
爆発を起こす。

「……まだ勝負は終わってません！」

最後の通信の後、自機から脱出し、雪原の上に降りた妖夢がハリア
ー？を睨みつけ、山中に消える。

「……良い心意気ね。そこまで言うなら決着を付けてあげようじゃないの」

咲夜もハリアー？を着陸させ、妖夢を追って山へ踏み込む。

「……あら、家の妖夢の帰りが遅いから心配して来てみれば、面倒そうなのと鉢合わせしちゃったわね」

「あんたが黒幕かしら？」

直感を信じて幻想郷の空を昇り、成仏や転生を待つ霊達の世界“冥界”へと飛び込み、冥界の主の住む館、白玉楼を目指していた霊夢のイーグルを、S u - 27 フランカー、そしてそれを操る冥界の主、西行寺幽々子が迎えた。

互いに50キロ程の距離をあけている二機の間で言葉が交わされる。

「黒幕？それって食べられるのかしら？」

「……はあ？」

「冗談よ。じゃあ、花見の宴の前菜に、紅白の饅頭でも頂こうかしら」

幽々子がレーザー照射を行いながら右へ急激な方向転換を行った。

霊夢も一拍遅れて左へ転換、フランカーの右後方へ抜けレーザーから逃れる。

交差後、フランカーを加速させた幽々子は上方宙返りの途中でロール、機体を縦方向にUターンさせる。

霊夢もアフターバーナーを焚き、こちらは旋回せず突き放そうとする。

充分な距離を取った所で旋回し、照射を行う。

両機の搭載する中距離ミサイル、A I M－9 M、R－27 Rには約20キロの最大射程の差がある。

鳴り響く警報もまったく意に介した様子の無い幽々子は平然と突撃し、最大射程の50キロを切ったイーグルに向かって一発のR－27 Rを発射。

回避の為にレーダー照射を打ち切ったため、振り出しに戻った両機が再び対峙。

もう一度突っ込もうとした矢先、幽々子に通信が入る。

「……そう、ありがとう。直ぐに戻るわ」

通信を切った幽々子がフランカーを旋回させ、白玉楼の方へ引き返す。

「…逃げる気かしら？」

「そうとってくれても別に良いわ。じゃあ、後は任せたわよ」

「任せる？……！？」

突然のロックオン警報に慌てて追跡を中止する。

「こんばんわ。博麗の巫女。貴方の相手は私よ」

フランカーと入れ替わりにイーグルと対峙した、S U－37テルミナートル。

「……まさか、真の黒幕は貴女ってオチかしら？」

「ただの共犯よ。ちょっと予定外の事態が続いてるから、自ら打って出る事にしたのよ」

それを駆る妖怪の賢者、やくもゆかり八雲紫。

「そっちの事情は関係無いわ。異変に関わってるなら、敵よ」

「此処は通さん！」

白玉楼の一角。

廊下に幾多の家具や備品を組み合わせ築いたバリケードの向こうから、紫の式（使い魔のようなもの）、八雲藍がAK-47の弾幕をまく。

装弾を使いきった銃を捨て、畳に突き立てられた他の銃を引き抜いて撃つことで間断を限りなく小さくした弾幕を床下に隠れてやり過ぎしながら、隙を見て魔理沙が二十六年式拳銃を、アリスの指示を受けた全長50センチ程度の戦闘用武装人形達が手にしたFAMAS、FN P90を撃ち返す。

「アリス、取り敢えず乗り込んだは良いけどよ、どうすんだ？」

「どうするも何も、此処まできて手ぶらで帰れるわけないでしょう」

「それはそうだが…伏せろ！」

二人が伏せた上から人形達が覆いかぶさり、外に居た他の人形が引き剥がしてきたバリケードの一部をかぶせる。

藍がRPG-7から放った焼夷榴弾が炸裂し、900個の鉄球と3000個の焼夷ペレットが半径15メートル以内を薙ぎ、焼き払う。

「……屋内で焼夷弾使うとか、とんだ常識知らずね」

「まあ、火事にならないあたり、耐火構造にはなってるんだろうな。それより、大丈夫か？お前、自分の身を守る分まで私の方に人形を回しただろ」

「これしきの怪我でさわぐなんて見っても無い真似はしないわ。たかが腕が血まみれになったぐらいで」

「充分大怪我だと思うぜ」

「：これだけ献身してあげたんだから、ちゃんと戦果はあげて来なさいよ」

「解ってる。田舎者なめるんじゃないぜ？」

「……さて、どうすっかなあ」

魔理沙の目の前には藍のみならず、自宅の危機に急遽とんぼ返りした幽々子も加わり一層強固になった防衛線がある。

魔理沙が手にする二十六年式拳銃はその威力の無さに定評がある。職人の手で作り込まれた美しいフレームが気に入ってコレクションに加えたものであるが、火力こそを最重要視する彼女にとっては扱いづらい銃だった。

「ま、どうするも何も、外の人形達が重火器を持って来るまで時間稼ぎをするしかないんだが」

オスプレイの警備のためにおいて来た武装人形達が機内に積み込んであった重火器群を持って来るまで、もうしばらく掛かりそうだ。因みに、軍隊における重火器の基準とは一般的に砲兵科が扱う砲類の事であり、歩兵科で扱われる無反動砲や迫撃砲等は砲類ではあれど軽火器に分類される。

しかし自衛隊では普通科（歩兵科）で扱う砲類でも重火器に分類されるなど国によって違いがあり、魔理沙は日本式の分類で重火器と呼んでいた。

「よし、撃てっ！」

霊夢は困り果てていた。

どうやっても紫の操るテルミナートルの背後を取れそうにないからである。

距離を取ればアクティブ・レーダー付きで最大150°／sの旋回

性能を持つR-77が、距離を詰めれば12Gの加速度にも平然と耐え抜くR-73が待っている。

背後にまわろうにも、クルビット（高度をその場から殆んど変えずに縦に一回転する曲芸飛行）をやったのける推力偏向エンジンを持つテルミナートルはイーグルより短い半径で旋回できる。

本来その場でまわれ右をするがごとき機動はパイロットが耐えられない為不可能な筈だが、それを可能にするのが妖怪という人外の存在が持つ肉体の基本スペックである。

その反則的な機動力に無理矢理ついて行こうとして限界まで機体と自分自身の身体に負担を強いた結果、満足に血が回らずブラックアウトしかけている頭で、それでも負けん気だけで操縦桿を操っていた。

今もまた、一瞬とんだ意識の所為で出来た隙を突きイーグルに照準が合わせられる。

「……………」

精神的にも肉体的にも疲れた霊夢は、これまでのように逃げるのではなく、あえて機体をテルミナートルの方へ向き直らせ、サイドワインダーを放つ。

相互の短距離空対空ミサイルが空中で交差した。

イーグルの機体がより早く命中したR-73により、爆散する。やや遅れたサイドワインダーがテルミナートルの左主翼を貫く。

「……悪いわね。私は負けず嫌いなものよ」

「……この期に及んで引き分けに持ち込もうなんて、相変わらず往生際の悪い巫女ね」

愛機から脱出した二人が、片方は清々しそうに、片方は苦々しくつぶやいた。

「そうそう、こういうのが無いと始まらないぜ」

魔理沙は人形の運んできたAT4―CSを受け取った。

「…RPGのお返しといこうじゃねえか」

床に伏せ、廊下の隅から直角に曲がった先に居る敵に砲口を向ける。人形が数体飛び出して銃撃を行い藍と幽々子の気を惹いた隙に照準、撃針を起こし、人形達を退避させる。

「くらえっ！」

ランチャー後方から反動を相殺する為のバックブラストの代わりに塩水が飛散し、それと同時に84ミリAST弾が滑腔して飛んで行き、信管を瞬発に設定された砲弾が銃弾を防いでいたバリケードを爆破。

「ははっ、やっぱパワーが一番だぜっ！！よし、突入！」

「……私達の完敗だ」

「…ぐすっ」

数分後、人形達にライフルを突き付けられ、白い手ぬぐいを振る藍と涙を拭う幽々子が降伏した。

更に一日も経たないうちに、魔理沙が撃ち上げた信号弾で誘導されて来たハリアー？に乗ってきた咲夜と、深紅の手錠と同色のガムテ

1。プで拘束された妖夢、霊夢に紫が白玉楼に集まり、今回の異変を起こした者全員の降伏、これを持って異変解決とする事が決定された。

STAGE. 7. 5. Afterwards

「……………そんな」

「泣いても、無理な物は無理ですよ…」

「……本当に良いのかよ!?!」

「はい。既に済まされております」

前者は霊夢。後者は魔理沙。

幻想郷一の技術屋集団でもある河童の工場を訪れ、霊夢は大破したイーグルの修理を依頼しようとしたのだが、実物を見やった職人から修理不可能と烙印を押された。

魔理沙はあれ以来何かと行動を共にするようになったアリスと、F-2Aの代わりとなる機体や、前回の戦闘で消費した武器弾薬の追加購入の商談に来たのだが、既に別人が彼女の名義を使い購入契約が結ばれており、内容を確認して驚愕していた。

同じく機体の修理依頼に訪れていた八雲一家が、先立っての戦いの賠償として機体の購入を行い、既に支払いまで済ませてしまっていたのだ。

「此方、八雲藍様が霧雨魔理沙様、アリス・マーガトロイド様名義で購入されたF-2Bでございます」

F-2BはF-2Aの複座型である。

また、以前魔理沙がA型を購入した際に少しでも費用を浮かせようと、より格安で手に入ったF-16用のレーダーを取りつけていたのだが、今回はAAM-4、AAM-3等の搭載兵器、アビオニクスも最新の物がそろえてある。

「こんな良い物をただでくれるとか：なんか、AT-4CS撃ったの申し訳ない気分になるな」

「良いじゃない。戦利品だと思って堂々と受け取りなさいよ」

「：そうだな。そうだと思っておこう」

「あの、霊夢様？」

「……何よ」

「八雲紫様より、貴女にこれを渡すように、と」
職人が霊夢に書類を渡した。

「：F-35Bライトニング？？これがどうしたのよ」

「ですから、貴女にこのF-35Bの完成品を格安で渡すように、と言われております」

「格安って、そこは空気を読んで無料にすべきところじゃ：」

「いえ、定価の八割引きです」

「八割：不満は多いけど、まあ妥協すべきところね。紫に感謝するわ」

「伝えておきます」

「そこで水を入れて、後は：」

「はい：」

紅魔館の厨房で、妖夢は咲夜に料理を教わっていた。

白玉楼において炊事は妖夢の担当する仕事では無いのだが、

「三度の飯よりも一日三回御飯を食べる事が好き」

と意味がよく解らない天然ボケをやったのける幽々子様の為に、とわざわざ咲夜に頼み込みに来たのだ。

「火を弱めてじっくりと…」

「はい…」

以前、森の中で行われた二人の真剣勝負は咲夜があっさりと勝利を収めて終わった。

ある程度開けた場所での地上戦ならナイフが武器の咲夜より、刀を武器とする妖夢の方が有利に感じるかもしれないが、咲夜には投げナイフというもう一つの特技があり、半径約30メートル以内ならほぼ必中と、近中距離双方の戦闘をこなせる万能ぶりである。

第一、森の中ならば満足に刀を振るう事は難しい。

本人の気概に実力が付いてこそ、そして本人もそれを自覚しているため、実力者を見つければ手当たり次第に教えを乞うており咲夜もその根性に応えようと一段と張り切っていた。

料理の他にも家事全般、陸空戦闘技術等、館のメイドや自分にも負けない従者として。

互いに張り切りすぎた結果だんだん方向性がずれ出し、しかもそれに気付かないのは御約束かもしれない。

STAGE. 7. 5. Afterwards (後書き)

区切りが良いので、このあたりで一旦中断。

遊びで作った小説を此処まで読んで下さった方、本当にありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8731t/>

東方Combat

2011年11月16日09時39分発行